

犬の避妊（卵巣除去）/去勢に関する長期的な健康面でのリスクと利点

Laura J. Sanborn, M.S.

May 14, 2007

要約

犬に関心のある私たちのほとんどは、ある時点で、ペットを避妊/去勢するかどうかを検討する必要があります。伝統的な考え方では、早い年齢で避妊/去勢をする利点が、リスクを上回るとされてきました。そしてそれを相殺する論拠が示されている今もなお、その伝統的な考え方が避妊/去勢の意思決定において支配的となっています。

サンボーン女史は、この問題を解明するために、獣医学の文献や学術論文を徹底的にレビューしてきました。雄・雌それぞれの避妊/去勢の健康への影響を評価するため、50件以上の論文を査読し検討しました。骨肉腫、血管肉腫、甲状腺機能低下症、そして去勢した雄犬の頻繁に発生する疾患などのリスクを、とうてい無視することはできません。ペットの健康や幸福を考える上で、動物医療に従事する人やペットオーナーは責任を持って、去勢することのコストと利点の比較を誤りなく検討しなければいけません。雌犬の避妊についてはさらに複雑であり、全ての患者に対する標準的な処置ではなく、個体ごとに動物医療の意思決定が必要かもしれません。

このレビューは、包括的な一般化を示しているものではありません。むしろ著者は、私たちに、個々の動物に対して利用可能なすべての健康と病気に関する情報は、評価が必要であることを考慮するように求めています。その上で、ペットの性別、年齢、犬種、そして特定の環境（今後の世話や飼育、しつけなど）を踏まえて、最良の判断がなされるべきとしています。

この重要なレビューは、動物医療の提供者だけでなく、ペットオーナーに対しても、情報に基づいた意思決定を行うのに役立つものです。

Larry S. Katz, PhD
Associate Professor and Chair
Animal Sciences
Rutgers University
New Brunswick, NJ 08901

はじめに

米国では健康上の理由から、犬のオーナーは犬の避妊/去勢をしばしば勧められます。いくつかの健康上の利点が引き合いに出されますが、まだ疑わしい健康上の影響については通常は示されません。避妊/去勢の健康への影響を議論するときに、しばしば健康上のリスクがに言及されなかったり、いくつかのリスクが示されたとしても、最も深刻なリスクについては触れられないこともあります。

本稿は、獣医学文献に記載されている、犬の避妊/去勢に関する長期的な健康へのリスクと利点を要約する試みです。本稿は、犬の頭数の抑制という観点からの避妊/去勢や、犬の行動に基づく避妊/去勢の影響について、議論するものではありません。

本稿にまとめられる健康上のリスクと利点のほぼ全ては、犬の遡及的な疫学的研究からの調査結果です。やがて振り返ってみることで潜在的な関連性が審査されるものもあれば、将来的な調査研究により、今後潜在的な関連性が審査されるものもあるでしょう。

概要

獣医学文献を読むことの目的は、犬の避妊/去勢に関連する長期的な健康上のリスクと利点において、複雑な状況を明らかにすることです。犬の健康にとって、避妊/去勢は有益と有害両方の影響があるという証拠があげられています。そして、私たちがまだこのテーマについて、本当には理解していないことも示唆されています。

結局のところ、将来の健康上の問題を防ぐために、大部分の雄犬（特に若い雄犬）が去勢されていることについての、説得力のある論拠が見あたりません。去勢することによって生じる健康上の問題は、ほとんどの場合において、健康上の利点を上回るかもしれません。

雄犬の去勢についての肯定的な面

- 小さいリスク（1%未満）ではあるが、精巣ガンのリスクがなくなる。
- ガン以外の前立腺の疾患のリスクが減少する。
- 肛門周囲瘻のリスクが減少する。
- 糖尿病のリスクが減少する可能性がある。（決定的なデータはなし）

雄犬の去勢についての否定的な面

- 1歳までに去勢を行った場合、骨肉腫（骨のがん）のリスクが著しく増加する。骨肉腫は、中大型犬や大型犬に多く見られる予後不良のガンである。
- 心臓の血管肉腫のリスクが1.6倍に増加する。
- 甲状腺機能低下症のリスクが3倍に増加する。
- 進行性の老年性認知症のリスクが増加する。
- 肥満のリスクが3倍に増加する。肥満は、犬の多くの健康上の問題に多く関わっている。
- 小さいリスク（0.6%未満）ではあるが、前立腺ガンのリスクが4倍に増加する。
- 小さいリスク（1%未満）ではあるが、尿路系のガンのリスクが2倍に増加する。
- 整形外科上の疾患のリスクが増加する。
- ワクチン接種の副作用のリスクが増加する。

雌犬の場合は、状況はもっと複雑です。いくつかの（すべてではない）のケースでは、避妊に関連する健康上の利点の数は、健康上の問題を超越することがありますが、結局は、避妊が、全体的に良好な健康

状態の確率を高めるか下げるかは、おそらく雌犬の年齢や、犬種ごとに異なってくるさまざまな病気の相対的なリスクに依存するのでしょう。

雌犬の避妊についての肯定的な面

- 2才半までに避妊を行った場合、乳腺腫瘍のリスクが大幅に減少する。乳腺腫瘍は、雌犬に最も多く見られる悪性腫瘍。
- 子宮蓄膿症のリスクがほぼなくなる。子宮蓄膿症は、避妊していない雌犬では約23%が発症しており、1%が死亡している。
- 肛門周囲瘻のリスクが減少する。
- 非常に小さなリスク（0.5%以下）ではあるが、子宮・子宮頸部・卵巣の腫瘍のリスクが減少する。

雌犬の避妊についての否定的な面

- 1歳までに避妊を行った場合、骨肉腫（骨のがん）のリスクが著しく増加する。骨肉腫は、中大型犬や大型犬に多く見られる予後不良のガンである。
- 脾臓の血管肉腫のリスクが2.2倍に増加、心臓の血管肉腫のリスクが5倍以上に増加する。これはいくつかの犬種では多く見られるガンであり、主要な死因にもなっている。
- 甲状腺機能低下症のリスクが3倍に増加する。
- 肥満のリスクが1.6~2倍に増加する。肥満は犬の多くの健康上の問題に大きく関わっている。
- 避妊した雌犬の4~20%が、避妊に伴う(?)尿失禁を患っている。
- 持続的または再発性のある尿路系の感染症のリスクが3~4倍に増加する。
- 特に思春期の前に避妊した場合は、recessed vulva(?), 膺の皮膚炎、膺炎のリスクが増加する。
- 小さなリスク（1%未満）ではあるが、尿路系腫瘍のリスクが2倍に増加する。
- 整形外科上の疾患が増加する。
- ワクチン接種の副作用のリスクが増加する。

一つ明確なことは、公開されている避妊/去勢に関する情報の多くはアンバランスであり、誇張されていたり、証拠によってサポートされていない主張が含まれています。ペットオーナーを教育することを手助けするというよりもむしろ、その多くは、犬の避妊/去勢の関わる健康上のリスクと利点について、誤解を生むのに貢献してきました。

小児避妊/去勢という現代の習慣はもちろん、生後半年という伝統的な避妊/去勢の年齢も、犬たちを健康上のリスクに影響されやすくしているように思われます。そしてそのリスクとは、医学的な必要性を除き、成犬になるまで待てば避けることができたものであり、多くの雄犬においては前述したものです。

避妊/去勢の長期的な健康リスクと利点のバランスは、犬一頭一頭によって違ってくるでしょう。犬種、年齢、性別は、個々の犬にとっての非医学的な要因と併せて、考慮しなければならない変数です。すべての飼犬に対して総花的な推奨は、獣医学文献の調査結果からは、指示されないように思われます。

以上